

もみじメイク
彩野

手のひらに収まる鏡をのぞく。

前髪をちよつと直して、口をあけて笑ってみる。よし。電車に揺られながら、手鏡を鞆に戻し、わたしは窓の外に視線を向けた。

やわらかい午後の陽ざしを浴びて、電車は線路の上をのんびりと走る。流れていく景色は、あまりにもゆつくりとされていて、まるでそこだけ時間が止まっているみたいだった。規則的なガタンゴトンという音が体の芯に響いて心地よい。足元をあたためる温風が、冷えた体にちようどいい。

平日の昼下がり、そして鈍行だということも相まって、この車両はわたしだけを乗せていた。ちよつと大きな声で、はやりの歌を口ずさんでみる。

男女が出会い恋に落ちる、何の変哲もない歌詞だった。でも、メロディが頭の中でリフレインして、いるところで、ブレーキがかかる。慣性の影響で体が倒れ、そして電車は駅に滑り込む。

ドアが開き、そして閉まる。

誰かが入ってきたことで、自分の居場所がなくなつた気がして、残念だと感じて、あーあ、という視線を、

その誰かに向けた。

そこで、わたしの思考が停止する。

電車が動き始めた衝動で、よろめいたその人に、わたしの視線が釘付けになった。

ひざ下までの黒いロングブーツ、もう冬だというのに露出した白い太もも、スパンコールがふんだんにあしらわれたミニスカートに、上は細身のライダースジャケット。走ってきたためか膝に手について、荒い息をしている。

何よりわたしを驚かせたのは、そんなセクシーな格好をしているその人が、頭をハゲ散らかした中年男性だったからだ。

産毛程度の頭頂部に、脂ぎった肌、額と頬に刻まれた皺。

綺麗な体型と違いすぎる顔に、どこかで首だけ入れ替わってきたのかな、と本気で考えてしまった。

そんな男が、こちらに一瞥をくれる。視線が合う。反射的に目をそらしてしまう。そのあとで、わたしは変な恐怖感に駆られて、他の車両に移ろうかどうかを思案しながら、それでも、この女装した男に興味を奪

われていた。

やつと息を落ち着かせた男は、よし、と小さく言う
と、おもむろにブーツを脱ぎだした。

こわいこわいこわい、とわたしが心の中で震えてい
ることなどお構いなしに、男は大きな鞆の中から黒い
紐状のものを取り出す。

果たしてそれはストッキングであり、男は他人の視
線——わたししかいないけれど——も気にせず、そ
れを大胆にはきはじめた。スカートの中にまで上げて、
股下まで密着させるように、最後に股を大きく開く。
皺になっていないか確認してから、ブーツをはきはじ
める。

黒いストッキングは花柄だ。

紅葉も終わり冬の到来を告げたこの時期に、生足を
出せるのは女子高生までだから、それは必要な寒さ対
策だと、わたしは思った。

次に男は、さっきのわたしと同じように鏡を取り出
し——大きさは、わたしの顔ぐらい——、同じく鞆か
ら取り出した化粧品で下地を作っていく。

枯れた肌から、どんどんと潤いが溢れてくるよう

だった。大きく開いた胸元まで塗りこんでいく。パットでも入れているのか、服の上から見ても、男の胸は大きい。自分と比べると、なんとなく負けた気がした。ファンデーションを服につけないよう塗って、頬に桜色のチークを入れる。次に、ほとんどなかった眉を塗りはじめ、

ここで電車が大きくカーブ。これでは手元が狂ってしまう！

というわたしの心配をよそに、男は器用に細く美しい眉を作り上げると、薄紫のアイシャドウ、アイラインを入れマスカラでまつ毛を仕上げていく。

出来上がった豪華な瞳に、わたしは吸い込まれてしまいそうだった。

濃いけれど、下品じゃない赤色の口紅を引いて、鏡の前で顔を振りながら、化粧の確認を行う。

四十代男性だった顔が、一駅にも満たない時間で、すっかり二十代半ばの女性に変化した。

呆気にとられているわたしは、歌舞伎役者の化粧みたいだなと思った。それもそのはず、男の頭はまだ寒々しいままだったからだ。

うん、と大きくうなずいた男が次に取り出したのは、薄茶色の胸元まであるかつらで、それを、よいしょ、という掛け声で頭にかぶせる。カチ、カチ、という硬い音がしてかつらが固定される。

どこからそんな音がしたのか、と疑問に思っている間にも、男は偽物の髪を手で梳いて整えていく。くるくるのウェーブのかかった髪をヘアスプレーで固めながら、ボリュウムのある髪型に仕上げていく。

最後に、香水をぽつと付けて、彼はどこから見ても、スレンダーで華やかな街を彩る女性に変身した。

化粧道具やかつらが詰まっていた大きい鞆の中から、豹柄の可愛いバッグを取り出し、その大きな鞆を棚の上に押し込んだ。豹柄の鞆から、ネックレスとピアスを取り出して装着する。一緒に出した、コンパクトでそれを確認し、こちらを向いた。

途中から、堂々と男の変身を見ていたわたしは、男と目があっても、まるでテレビを見ているような気分です、彼が——もう、どうみても彼女なのだけれど——微笑んでウィンクした仕草も、どれもが洗練されており、化粧品のコマーションルを見ている感覚だった。

電車が止まる。

男（？）が立ち上がって出ていく。そこで、自分も降りる駅だったことを思い出し、慌てながら外に出る。男（？）は、あの豹柄のバッグしか持っていなかった。あの大きな鞆は、あとで忘れ物センターにでも取りに行くのだろうか。

ホームに降り立ち、二階にある改札に向かう。

颯爽と大股で歩く男（？）がエスカレーターに乗る。わたしもそのあとに続いてエスカレーターに乗り、それでも男（？）を見上げていたので、ミニが揺れた拍子に、白い下着がのぞいたのをばっちり見てしまい、変な気まずさに襲われ、目を自分の靴に落とした。

二階の改札の向こうには、長身の格好良い青年が立っていた。手を挙げて笑っている。小型犬みたいに可愛らしい。

その青年に、さっきの男（？）が駆け寄っていく。待った―？と聞く高い声が、電車の中で聞いた声と違い、わたしをまた驚かせた。

男（？）は、するすると蛇のように、長身の青年の腕に自分の両腕をからませながら、寄り添うようにし

て歩きだした。

二人並んだ姿を見てみると、どこからどう見ても、誰がどう見てもお似合いのカップルだった。お互いがモデルのような体型で、お洒落に着こなされたトレンドの服装、笑顔で歩いて行くそのさまは、この街のカップルたちの理想像で、みんなが羨むようにして眺める存在だった。

わたしも改札を抜け、遠くなっていく二つの背中を見つめていると、

「おい」

と声をかけられて、額を軽く、ぺしつとたたかれた。

「あ、おはよ」

「おはよう、もう昼過ぎだけどな」

すぐ目の前に彼氏が立っていた。ちよつと不満そうな顔をしている。

「電池切れてるのかと思った。さつきから声かけてるのに反応ゼロだし」

「ああ、ごめんね」

「心ここにあらずって感じだったけど、何かあったの？」

「あれ、どう思う？」

角を曲がつていく、あのカップルを指差す。

「どう思うって、格好いい男と、綺麗な女だなあと
思うけど」

「だよね」

とわたしはうなずいて、横に立つ彼の全身を見た。

ちよつと汚れたスニーカーに、くたびれたカーゴパ
ンツ、茶色のパーカに安物のダウンジャケット。

ため息がもれる。

ちなみに、わたしの格好はというと、黒いニットの
タートルネックに、紺を基調とした花柄のワンピース、足
には濃い色のデニムを履いて、ヒールの低いブーツ、
そしてカーキ色のちよいミリタリー系のジャケットを
羽織っている。化粧は、限りなく薄い。

ふたつ目のため息。

これはこれでお似合いなのか、とわたしは肩を落と
すのだった。

それにしても、と彼が言う。

「この季節に、あのスカートの短さはすごいな」

「うん、根性が必要だね」

「お前もちよつと分けてもらったら？」

ばしん。

とりあえずお前は、もみじ型のチークでもつけとけ、
バカ。

了

もみじメイク

2010年 2月28日 公開

著者 彩野

編集人 今出川潤

連絡先 vert@bugyo.tk

企画・制作 ver.T

<http://vert.bugyo.tk/>

このお話はフィクションです。
本作品に関する諸権利は著者自身に帰属します。
転載、引用される場合は著者および出典の表示をお願いします。